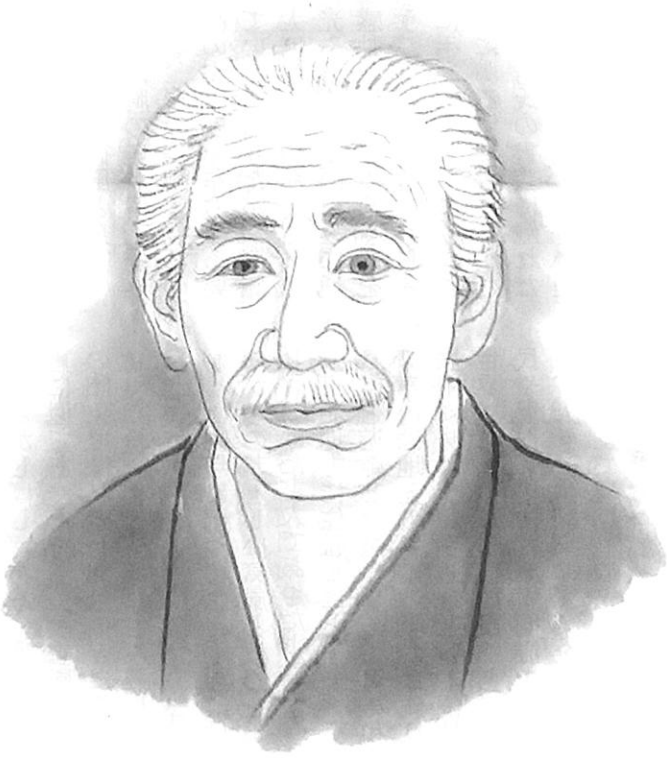
性心

せんしん

34号　２０２４年１２月１日



御風会会報

御風の書の魅力

渡部　匡

拙宅には現在、二十点近くの相馬御風の肉筆遺墨がある。すべて私自身が筆者への興味から集めたもので、軸物、扁額、短冊や色紙の額などから、折々の心境に合うものを選んで自室に掛けることをひそかな楽しみとしている。

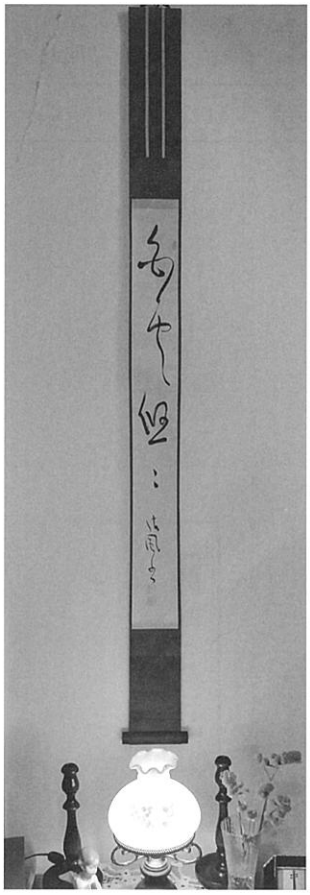
今から七、八年前に知った事だが、私の曽祖父にあたる渡部坦治は、大正九年から十四年まで糸魚川高等女学校の校長を務めており、仕事その他を通じて御風とは長く交流を持ち続けたようだった。そして坦治の長男である祖父・渡部元は、御風のすすめにより早稲田大学へ進んで文芸活動に耽り、かなり下った戦中の昭和十六年には「木かげ」の同人となる。嬉しいことに先年、御風会の金子善八郎先生のご尽力により、戦後のある時期までに、祖父が二百首以上もの歌と万葉集研究論文を雑誌に寄稿していた事が明らかとなった。

昭和十九年に御風から祖父宛に届いた一通の封書が、今私の手許にある。便箋六枚に及ぶその手紙を最初に父から見せられた時、闊達で心細やかな文意もさることながら、万年筆による縷々とした文字列の勢いに大層心を動かされてしまった。まさに氏の芸術に傾倒するきっかけとなる邂逅であったが、書の専門的な審美眼など持ち合わせない私としては、この遺墨蒐集は先祖二人の御風との深い縁が導いた末の執心、執着であるように思えてならない。

昔の文人の遺墨は皆それぞれに能筆で味わい深いものがあるが、とりわけ御風と良寛の書を眺める時、私は特別に胸の奥が清く澄みわたってゆくのを覚える。形の美醜、技巧の精度などがいかに作品の完成度を左右する要素であるかは承知しているつもりだが、御風の書はもっと人間に大切な根本的な何ごとか、例えるなら朝の日の光や山の清水の恵みに通ずる、人心を素朴な感動で満たしてゆく力を秘めているように思う。自然体の柔らかな線、大空を仰ぎ見て存分に手を動かしたようなおおらかさ、運筆の背景にある精神の清らかさと気品。これらは多少とも氏の書芸に触れたことのある人ならば、比較的感取しやすい美点ではないだろうか。

また御風の書は、長く壁に掛けていて見飽きるという事がない。印刷物では判じ難いところかも知れないが、当初は柔らかみがあって佳いと感じた程度の書も、時を経るごとに精神力を内に蓄えた貴ぶべき作品に見えて来ることがしばしばある。書体そのものは、良寛に似てあくまでも普段着風である。ただ私の印象では私淑した師ほどに侘びた風情は表立っておらず、越後の冬の厳しさを直接に想起させるところもない。病に臥すことの多かった晩年に至ってさえ、雪解けの春の水さながらの若々しい気風と童心を紙面一杯に現しつづけた書人であったように思う。

東北地方に住む私にとって、御風の書は、日常と遊離した糸魚川の山海の穏やかな風光、あるいは地元の人々の温かい親切心といった、旅中に味わうしみじみとした情趣と相重なる世界でもある。自然の風物と、そこに働く漁民や農民の姿にたえず関心を寄せ続けた御風は、人々の生活上の哀楽を、みずからの芸術行為と別ち難いものとして尊ぶことのできた人道の士であった。糸魚川の風土を知悉することは、また必然的に、御風の遺墨と文芸への親しみの情を深くすることに繋がるものと私は考えている。



御風書「白雲悠々」

『相馬御風書簡集 下』に見る 地元糸魚川の人々との交流

―岡田甚英・松野泰助・村松美雄

金子　善八郎

一　岡田甚英

上早川の人。旧制高田中学の同級生。中学卒業後、御風は旧制第三高等学校（現 京都大学）を受験することになり、岡田は金沢医学専門学校（現 金沢大学医学部）を受験することになったとき、金沢まで一緒に行く予定でしたが、御風の都合で、御風一人での上京ということになります。後に、生まれて初めての一人旅、その時の心細さ、不安は今もなお忘れることができないといっています。

その後、御風は早稲田へ、岡田は金沢医専へ進学しましたが、二人の交友は、続きます。岡田は「絵」が好きだということで、御風は自分宛の画家達の絵手紙を贈っています。太田三郎の三枚、大下藤次郎の二枚、太田喜二郎、町井英ら五人の画家の絵手紙八枚。

このうち、話題になったのは、竹久夢二の絵手紙。「今晩のだしものは、あまりおもしろくないやう　ゆく（の）やめにいたし候　明晩ハきつと。明午後二時より　早稲田のグラウンドにて米艦とマッチある筈　あつたら入ら（つ）しやいまつてゐますよ」という文面、絵は淡彩で夢二と妻になった〝たまき〟が連れ添って歩く姿。

平成十三年（二〇〇一）、市内新町の岡田晋さん（甚英の孫）が公表しました。発表当時、地元の「新潟日報」、「産経新聞」スポーツ紙、月刊「絵手紙」などに報道、紹介され話題となりました。

御風の甚英宛の手紙は、昭和二十年から二十二年（一九四五～一九四七推定）に書かれたものですから、二人の関係はそれまで中断したものと考えられます。

手紙の冒頭に「御令息様わざ〳〵おたりよりくださいました上に、いろ〳〵お心づくしの品々おめぐみにあづかり感激の外ありませんでした。」そして「色あかきもみぢ葉、山茶花の一枝、熟柿、大好物の栗、久しく味はひ得ざりし芳香潤味の玉露等々～夢の如きよろこびを得させていたゞきました。」添えられた「御手紙くりかへし〳〵拝誦、あまりにも悲しき御不幸の数々～」とあります。

この「不幸」というのは、「御令息さま御二方まで御戦死の御事」です。そして、「何かお供物をと思ひましたが、時節柄町にはこれと申すものもありませんので～」といって老詞友野崎添水翁の画賛扇面三葉と、「世にも珍しい波乱の過去を切りぬけて来た一女人の画賛」一枚を添えました。この「女人」というのは、本名大石よね、難波の名妓妻吉のことです。

「両腕を斬り落とされ」たが「死んだ風を粧つてゐた為に、奇跡的に命をとりとめ」「幾度か自殺を願つたが」それもならず「煩悶の極悟りを開き～仏門に帰して今日まで～生きぬいて来た人」と紹介しています。そして、彼女は「私の文章や歌に親しみ何かにつけて心の相談相手として私をたよつて～何度か私を訪ねてまゐりました」と。（詳しいことは松野功さんの「洗心」二十二号参照）

手紙には自身の事も詳しく書かれています。「小生もからだはよくありません。半身がやはりいけないのです。～中風ではなくて、神経障害ださうです。」と。そして「林盛雄に一切まかせてゐたのですが彼のほうが先にまゐり」ましたと。林盛雄は、御風のいとこ、猪之吉の三男、東京帝大を出て医師となり、林家の養子となった人。元糸魚川高等学校々長の林純雄の父親。松沢善二の後を継いで第五代糸魚川医師会長となりました。

また、高田中学時代の友人のことにも触れています。「秋山八百蔵氏の名を伺ひ急に昔がなつかしくなりました。北村利喜造、秋山の両君と小生と上小町の小川といふ家に一しよに下宿してゐたことなどしみじみとおもひ出しました。」とあります。なお、この時の三人の写真が資料館に保存されています。

また、御風は「先年二回急性肺炎にやられ、昨年はちよつとした傷から敗血症になりかけまさに死ぬところでした。二ヶ所も切開手術を受け全く痛い目と苦しい目にあひました。それ以来めつきり気力衰へ～」、以来「門外に出ること殆どなく、御来客も大半失礼させて貰つて籠居孤坐気のむくまゝにしてゐます。」と。

―手紙の結びは「お互に苦い昔の夢でも追うてせめてものなぐさみといたしませう。」

なお、追って書きに、「一本つけての忘我は小生にも何よりの薬のやうです。しかしその水薬も最も得難いものとなりました。」と書き付けています。―相当にアルコール中毒が進んでいることをうかがわせます。

二　松野泰助

御風の先輩。御風の父親（徳治郎）が町長のときの役場の吏員。東京での御風の活躍の話を聞かされていたといいます。

そんな松野に、糸魚川退住を決意した御風は「俳句も良い。こんど歌をやらんかね。僕も近い内に糸魚川へ帰つてきますよ。」（「野を歩む者の会追悼記」）と言ったといいます。当時松野は、小学校の先生たち、金子健治、岩崎耕助、黒山秀毅などと「黒姫会」という俳句の会を作って荻原井泉水の指導を受けていました。

御風はこの時の発言どおり、大正五年六月、帰住と同時に松野らと「木蔭会」を組織しました。その後の進展はよく知られているとおりです。

書簡集に載っているはじめの手紙は、泰助宛の手紙ではなく、「良寛和尚九十年忌」の案内状です。

「来ル二十三日午後一時より当町直指院に於て～」というもの。「事（一）法会、（二）頌歌奉上、（三）談話、（四）斎（とき）供養、（五）詠歌、会費金一円当日御持参ノ事、ナホ当日ハ故禅師遺墨ソノ他の展覧ヲ行フ筈以上～発起、大愚会同人、催主木蔭会同人」御風に代って泰助が書いたものと思われます。この「代筆」に二人の関係がよく示されています。

次の書簡は「（18・1・25）糸魚川町蓮台寺松野泰助様　糸魚川町大町　相馬御風」。

「突然ながら水保の小川林三郎氏御長男戦傷死の由仄聞しましたが事実でせうか。」という問い合わせです。

三番目は「昨日夕刻無事当地に着今日午後を手はじめに郡内をまわります～出来るだけ御都合の上九日中に巻まで来てください。」というもの。（西かんばら郡巻町から発信）

四番目の手紙は「京都へ出て重態の眼病治療中の親友松野一畝君の為どうぞ一片の御同情と御喜捨とをおよせくださることを私から特に御願いたす次第で御座います。」という「喜捨」の要請。文末に「一金十円相馬昌治、一金五円藍野精一、一金五円金子健治」などと書かれています。

最後の手紙は「今日高嶋平三郎さんと梅原真隆さんが立ち寄るかも知れ」ないので、かねてからの会？には「出られなくなつてしまひました」という予定変更の通知。

三　村松美雄

明治三十五年、十九歳の時、京都から浦川原区菱田の村松に宛てた手紙。「ありがたき御歌のかず〳〵高田新聞紙上にて拝見仕り～深き御情の程身に沁みて辱なく思ひました」とあります。村松が自分の歌の載っている高田新聞を御風に送った、その返信と考えられます。

「当地に着しましてから同志社へ入学しやうと思つたが～僕の仏なく神なく只人と異なる神（真理）を信仰する～性質にハキリストなどハ汚らはしいと云ふので断然よしました。」

「又与謝野鉄幹の新詩社へ入社し当地の支部の人々の仲間入りをしました。」そして、「当地のいかづち会青葉会、新詩社支部の連合歌会に出席」し、その互選で自分の歌が最高八点になり「実にうれしかつた」と誇らしげに書いています。また、「其後は図書館通ひをやつて古典、英語等を少しづゝ勉強して居ります。」とも。そして、「京都ハ腕を磨くべきの地でない」ので「兎に角此四月東京早稲田へ行かうと思ふのです」と書いています。

また、「泣菫君の～詩集を御らんになりましたか、僕ハ見ましたが慥かに日本未曽有の詩だと思ひます。～御入用なら買つて上げてもよろしうございます、何か雑誌御らんになるなら『文庫』か『明星』です他ハいけません一般に活気が乏しいです。」と書いています。

結びは

染髪様　洛東　御風

御風に贈られた八一著述より

岡村　鉄琴

一、

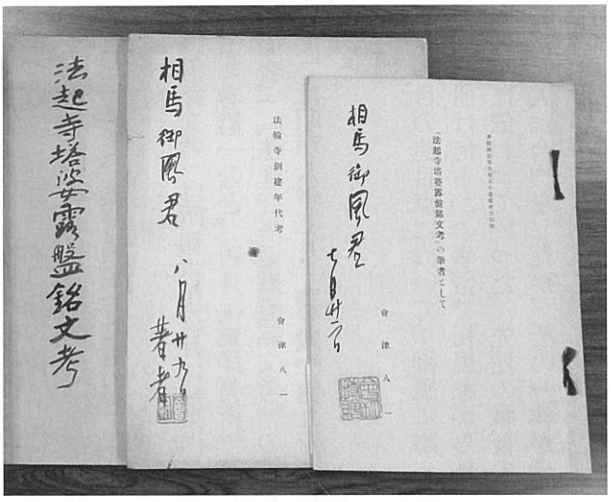
相馬御風（一八八三～一九五〇）の交友録の中でも、私は會津八一（一八八一～一九五六）との関わりに興味を抱いている。『没後60年　相馬御風遺墨集』（平成22刊）を編集した時にも、御風宛八一書簡および八一宛御風書簡の何れも、両人記念館に保管される全てを収録した。また御風と八一の双方と深く交わった木村秋雨（一九〇六～一九八八）のことをまとめた『木村秋雨　その書とコレクション』（平成24刊）の中でも、秋雨の遺した八一作と関連情報を収録した。

そのような視点を持つ者として、少し前に御風記念館に寄贈された中から、解説を付して紹介したい資料が目に止まったので、一文をまとめてみたい。

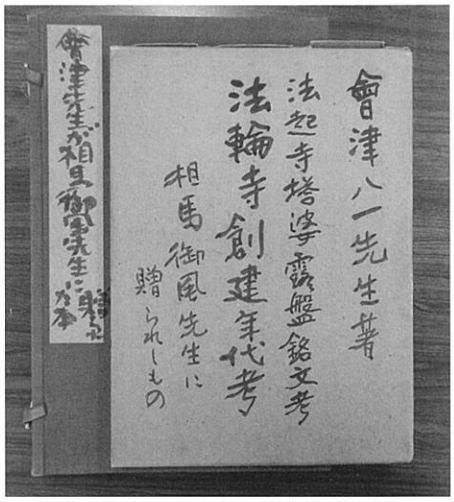
二、

それは一帙に入った三冊で、御風に贈られた八一論文の抜刷である。まず帙の題簽（だいせん）（題字）に「會津先生が相馬御風先生に贈られた本」と墨書してある。背表紙にもご丁寧に表紙と同じ題字を墨書している。

帙を開くと中に紙製の箱が入っている。その表紙というべきか表裏両面に、先の帙題と同じ書風で「會津八一先生著　法起寺塔婆露盤銘文考　法輪寺創建年代考　相馬御風先生に贈られしもの」と墨書がされている。



八一著述　抜刷三冊表紙



桜井五台山人書による題簽と書き付け

この紙箱に八一著述の抜刷三冊が入っており、薄く小型の抜刷小冊を二重箱に納め大切にしていた様子が分かる。

中身についてまず一冊。「法起寺塔婆露盤銘文考」と、表紙に八一自身肉筆一行がある。頁をめくると「第一九巻　四九」、最後の頁の隅には「65」、全文十七頁の文で、文末に「昭和六年四月二十日草」と印刷してある。

二冊目。夢殿論誌第九巻太子遺跡研究抜刷「法起寺塔婆露盤銘文考」の筆者として　會津八一、このように活字印刷が施される表紙左上に、「相馬御風君　七月廿一日（廿二日？）」と八一の墨書、その真下に「會朔持贈」（朱文印）が押してある。全文九頁。文末に昭和六年三月手記と印刷してあるのを、「七年十二月」とわざわざ墨書で訂正している。八一自身の書き付けであろう。神経のこまかい性格が窺えよう。

三冊目は「法輪寺創建年代考」、表紙にはやはり「相馬御風君　八月廿九日　著者」と八一が墨書、そして「會朔」白文印を捺している。

以上の三冊の内容を綴るのが拙文の趣旨ではないが、『會津八一全集』第十二の「書誌」情報で確認してみる。すると抜刷までは載せていない。第五冊（五番目の八一著述）として、「法隆寺、法起寺、法輪寺建立年代の研究」がある。八一の博士論文に相当するもので、この一冊の基盤となっているのが先の三冊なのである。

三、

以上三冊に関する情報は特に珍しくはないが、ここに紹介する館蔵になった本に限って、二つの注目点が挙げられる。

まず一つ目は、一冊に「會朔持贈」の印が押されていること。「朔」とは一日の別称で、八月一日生まれの八一はこのように「會朔」の自認称をしばしば用いている。「持贈」だから郵送ではなく、持参して贈ったことになる。印の上には幸い墨書でその月日が付記してある。

いつの七月のことだったのか。よく知られる御風と八一が直接会ったのは、八一が帰郷後の昭和二十一年七月五日のことだった。『全集』第十二の「年譜」によると、「七月四日、糸魚川へ行く。松井敬同道。高尾に一泊。五日、相馬御風を訪う。」、また第十一「日記」によれば七月四、五日の両日に御風を訪問したと記している。

もう一度「法起寺塔婆露盤銘文考」表紙の八一墨書を確かめると、「七月」は間違いない。続く日付が廿一か廿二か廿六か筆者には判読し難いのだが、この七月が戦後久方ぶりに対面を果たした二十一年のこと、その際に持贈されたものだったのだろうか。各文の発表と印刷が出来上がってから、これ程時間を空けて寄贈することは、八一の性格上余り考えられないのだが、従来の資料によると抜刷の仕上がった昭和六年以降の両者の接触についての記載はなく、今のところ謎としておく。

別の贈本「法輪寺創建年代考」の表紙への書き付けは「八月廿九日」。一冊ごとに献本したことになる。こちらの押印は「會朔持贈」ではないので、送付贈呈したものだろう。

『全集』の「年譜」と比べると、「法起寺塔婆露盤銘文考」は昭和六年三月に『東洋学報』第十九巻第一号と、四月『東洋美術』第九号に発表。「『法起寺塔婆露盤銘文考』の筆者として」は昭和八年七月、『夢殿』第九冊に掲載とある。

四、

二つ目の注目点について。御風に贈られた後、三冊は何らかの事情で相馬家から外に出て人手に伝わっていった。先述の戦後の再会時に二人は合作をしたが、その一作がやはり他者の手に渡った例など類する件はあった。

ここで文頭の帙と紙箱の墨書題字に改めて言及する。一見して私にとって直ちにそれは、誰の筆によるものか判明するもので、署名はないが新潟市内在住だった桜井五台山人（本名定一）氏の書である。氏は新潟県展当初に作品を発表したり筆の道を歩んだ人だが、一般の書壇とは交わらず、書人の書発表と異なる斯界の楽しみ方をされていた。ご自身の目で逸品を見抜き稀有なコレクションを形成、誰に誇ることなく自娯の日々を過ごされた。

桜井氏を私に紹介くださったのは、新潟市古町通の古書店主で八一の日常を物心ともに助けた佐久間栄治郎氏だった。察するにこの佐久間氏から桜井氏の手に件（くだん）の三冊は渡り、しかもそれは随分前のことだったと思われる。桜井氏の書斎に、このような八一の珍しい資料が何気なく置かれていたことが懐かしく思い出される。

氏の書は新潟市内の看板や石碑など、意外なところに点在している。何故ここにと思う場所なのだが、ひと昔前には氏の人と書を評価する市井の具眼の士がおられたのだろう。氏の書風には、八一と棟方志功の味わいが漂っている。

余計なことを、と桜井氏に叱られるが、館蔵品にまぎれゆく一資料にひと声をかけたくなり、思い出を交えて拙文を草させていただいた。文末に、氏が目の前で書いてくださった色紙を紹介する。その机上の大硯には、なみなみと墨が磨られていた。

（越佐文人研究会代表・新潟大学教授）

今日無事

福禄寿

御風と佐渡

榊　正喜

本年7月、インドで開催された世界遺産委員会において、「佐渡島（さど）の金山」がユネスコ世界文化遺産に登録決定した。新潟県初、国内26件目の世界遺産である。

本稿はこれを記念して、御風と佐渡について記すこととする。

一　はじめに

佐渡の歴史文化、民俗学研究の巨人である山本修之助が編じた『佐渡郷土文学選』（佐渡郷土研究会　1932）という書物がある。佐渡を題材とした文芸作品の粋を集めたものであり、芭蕉、馬琴、良寛等の古典をはじめ、紅葉、露伴ほか近代文芸の著名人の多数の作品が収録されている。ここに御風の短歌も掲載されている。

夢の国　　相馬御風

この里の磯辺に立ちてながめやる佐渡が島べは夢の国かも（出雲崎にて）

いにしへをおもふにたへずぬかづけばあたりにしげき虫の声々（黒木御所跡）

日の皇子のみ手植松も秋雨にぬれてさびしく立てりけるかも

世はうつり時は変れどそのかみの御相のまゝのこれのみほとけ（本光寺観音）

佐渡がしま真野の入江は秋をふかみ浪の穂しろく日に光りつゝ

佐渡がしま真野の入江の岸に咲く浜撫子の色のさみしさ

野菊さくみささぎ道の松かげにたちとまりきく昼虫のこゑ（真野陵への道）

こゝにして心はきよくつゝましし真野のみ山の松の下かげ（御陵にまうでて）

なお、本書序文も御風が書いている。

歴史的にも、地理的にも、佐渡はわが国に於ける最も豊富なものを蔵する地方の一であるが、それよりも古来多くの詩人文人たちの感興をそゝつて来た点で、佐渡ほど強い魅力を持つた嶋は他に多く類を見ない。佐渡はまつたく古来の詩人たちの多くにとりての神秘な夢の国の如きものであつた。

御風は佐渡を「夢の国」としており、並々ならぬ思い入れを感じる。

まず、佐渡は御風が敬慕する良寛の母の出身地である。良寛が亡母を詠んだ歌では「たらちねのははがかたみとあさゆふに佐渡のしまべをうち見つるかも」がよく知られる。

良寛が出雲崎から海向こうに毎日見ていた佐渡―御風も糸魚川の自宅裏の海岸から微かに見える佐渡に特別な思いがあったのは当然である。

そして、順徳上皇、日野資朝とその息子の阿新丸（くまわかまる）という、糸魚川、佐渡に縁ある歴史上の著名人の存在も大きい。

二　佐渡旅行

大正14年（1925）10月13日、御風は佐渡に渡り、4、5日滞在している。

おそらく渡航は、現在の佐渡汽船の前身である佐渡商船株式会社の貨客船、大正14年夏に直江津～小木～沢根航路で使用されていた「第一佐渡丸」に乗船してであろう。

到着後に旅館で文弥人形芝居などを見、翌日、山本修之助宅を訪問している。修之助の父の半蔵は佐渡一の史料収集家であり佐渡研究の重鎮。佐渡滞在の折、所蔵資料、なかでも良寛長歌、関係遺墨などを拝観したようだ。

佐渡の旅記念

翌年発行の『御風歌集』には大正十四年「十月初旬佐渡が島に渡りて」として、冒頭で紹介した「浪の穂」「浜撫子」「みささぎ道」の3首に加え、「小夜ふけて櫂の音きこゆいねがてにひとり物おもふ枕にちかく」の4首が収録されている。

これら歌から、黒木御所、本光寺、真野陵を訪れたことがわかる。いずれも承久の乱（1221）により佐渡に流された順徳上皇にまつわる史跡であり、修之助の案内によったという。このあたりは同氏著『佐渡の百年』（同刊行会　1972）に詳しい。

三　直江津小唄

直江津小唄（1929発表）の2番に佐渡が出てくる。「今日も見た見た荒川橋で　港出てゆく船のかげ　沖にゃほのぼの　夢の国かよ佐渡ケ島」という歌詞だ。

直江津航路の宣伝を含んだ歌詞であり、ここでも「夢の国」が使われている。

これより先、当初、直江津小唄として作詞され、のちに直江津港小唄と変題されたものの1番の歌詞も興味深い。

初め、「直江津ァよいとこ　港を見やれ　出船入船泊船　岡にや荷の山　工場の煙　沖にや見えます黄金花咲く佐渡ケ島」と作られたが、過程で「黄金花咲く」の部分が削られたようだ。曲にうまく乗らなかったのか、あるいは「黄金花咲く佐渡ケ島」が直江津のイメージに勝ってしまうと考えられたか。

四　歌碑・校歌

佐渡に御風の歌碑は二つある。いずれも平成初頭に建てられたものだ。「み手植松」と「浪の穂」の歌である。歌碑の建立経緯は本誌第3号と9号で藤巻道夫さんにより紹介されている。

校歌は6つ作詞。現在も歌われているのは赤泊小学校と相川小学校。相川小は1番で「黄金花さく佐渡が島」と歌われる。そのほか、真野中学校歌は山本修之助作詞の校閲をしている。

五　おわりに

御風が佐渡を「夢の国」とした源流は、やはり良寛にある。

『大愚良寛』（1918）附録「良寛遺跡巡り」では、出雲崎の熊木旅館の窓から見た光景を「見渡すかぎり港内にも港外にも波のうねりは殆ど見えないで、海はまるで眠ってゐるやうに見えた。海の向うに長く横はってゐる佐渡の島は丁度夢の中で見る山のやうであつた。」など、佐渡を表現するに「夢」という語を多用している。

美しく静かに佇む姿に、人間が魂の安住境を感じるその極致〝淋しみ〟を感じたのであろう。

御風生誕140年・春よ来い100年記念事業一覧

事務局

令和5年度には官民問わずたくさんの冠事業、記念事業が行われました。ここに抜粋して紹介します。

□広報いといがわ連載「四季折々の御風さん」令和5年1月号から翌年3月号まで毎月（全15話）掲載

□新潟日報 上越面特集記事連載
「ヒスイ沈黙の謎」7月25日～27日

□新潟日報「おとなプラス」特集記事掲載
相馬御風の足跡　7月29日

□CATV特番「信越トライウォーク～相馬御風生誕140周年～」放映：9/1～14（信越地域ほか広域で放送）

□糸魚川歴史民俗資料館ミニ企画展
「御風と祭りと春」　会期：4/1～4/23
「御風と山」　会期：5/27～6/25
「御風と童謡」　会期：4/29～5/21

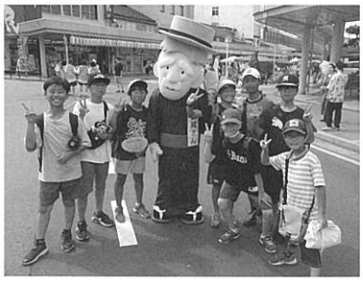
□相馬御風宅ミニ企画展「写真で比較する御風の生きた時代」　会期：6/3～7/30

□糸魚川歴史民俗資料館企画展「御風の愛したコト・モノ・ひと」　会期：7/1～9/18

□長者ケ原考古館企画展「御風と遺跡」　会期：9/2～11/5

□會津八一記念館（新潟市）企画展「良寛を愛した八一と御風」　会期：4/4～6/25
□良寛の里美術館（長岡市）特別展「良寛を敬愛した人びと展ー西郡久吾、相馬御風と長岡ゆかりの先人たちー」
会期：7/22～9/18
□「御風さん」ぬりえコンテスト全作品展示
□記念作品展
とき：10月7日～9日
会場：ビーチホールまがたま
※糸魚川市美術展覧会と同時開催
□糸魚川市都市交流協会総会 講演会
とき：5月9日
会場：市民会館3階
講師：榊 正喜 氏（文化振興課）
演題：御風の足跡
□記念講演会
とき：11月18日
会場：フォッサマグナミュージアムホール
講師：藤原秀之氏（早稲田大学講師）
演題：御風 八一 春城 三人の物語
□御風と翡翠の記念講演会
とき：11月26日
会場：市民会館 3階会議室
講師：榊 正喜 氏（文化振興課）
演題：御風さん入門ー業績の整理
講師：宮島 宏 氏（主催者から）
演題：御風と翡翠再発見の真相
主催：NPOまちづくりサポーターズ
□石塚勇 昼下がり朗読アワー
とき：8月11日
会場：市民会館ホール
出演：石塚 勇、未明ボランティアネットワーク、早稲田大学混声合唱団、ア・ラ・フネーズ
□第7回 御風さんを歌おう！
とき：11月26日
会場：市民会館ホール
主催：NPOまちづくりサポーターズ
□小中特支学校給食 記念献立
とき：7月10日（御風誕生日）を中心に

記念献立給食の食事会



ゆるキャラ御風さん in おまんた祭り
上　早稲田大学応援部とともに
右　こどもたちとともに

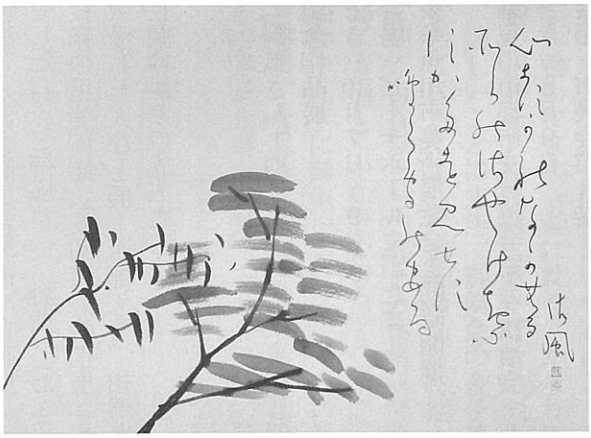
□おまんた祭り 本町通りブース設置
とき：7月29日
特記：御風生誕140年、三波春夫生誕100年記念うちわ配布
□おまんた祭り 駅北イベント広場 早稲田大学応援部パフォーマンス
とき：7月29日
内容：「都の西北」、コンバットマーチ、糸魚川へのエールほか

□記念ハミングツアー「秋の糸魚川で紅葉の高浪の池と相馬御風ゆかりの地をめぐる旅」
とき：10月31日
場所：御風宅・糸魚川歴史民俗資料館ほか
主催：株式会社ＫＯＫＫ

相馬御風記念館　最近の受贈品より

御風と深い縁のある上越市の野村様からの寄贈で、折帖のなかの一作品です。

心つかれながむるそらのさやけきに
すがたを見せず鳴く鳥のある



令和5年度　御風会事業報告

□御風生誕１４０年・春よ来い１００年「記念の集い」並びに総会
令和5年7月10日　午後3時半～
会場　史跡 相馬御風宅・料亭倉また

□会報「洗心」第33号発行
令和5年10月1日、６百部

□理事会（1回）
令和6年3月29日　午後1時半～
会場　糸魚川市役所会議室

□相馬御風生誕１４０年・春よ来い１００年記念「第15回相馬御風顕彰ふるさと俳句大会」への協力
賞品提供　児童生徒の部へ図書カード
令和5年12月2日
会場　ヒスイ王国館

【御風賞（最優秀賞）作品の紹介】
一般の部
小野　美智子　様（神奈川県川崎市）
みづうみを斎（いつ）く雨音半夏かな
児童・生徒の部
渡辺　匡　様（下早川小学校5年）
温だん化今年早目の衣がえ
松下　豪　様（糸魚川中学校2年）
フォワードは俺にまかせろ蝉時雨
藤木　絢太　様（糸魚川白嶺学校2年）
真夏日に産土神の猫の影

会員募集（年会費は二千円）

御風会では新規会員を募集しております。年会費は二千円。本紙をご覧になられた方で希望する方は、事務局までご連絡ください。

《表紙紹介》

越後千涯画
故 相馬御風先生相貌

越後千涯は本名斎藤作一。明治２８年、新潟県西蒲原郡大原村（現在の新潟市西蒲区）生まれ。
『大愚良寛』を読み感動。御風を訪ね、良寛画を描くことを勧められた。号の越後千涯は御風の命名。のち、會津八一の勧めにより「こしの千涯」とした。
本作は御風没後３日後に、在りし日を思い浮かべ描かれたもの。相馬御風記念館蔵。

【編集・発行】
御風会（事務局・相馬御風記念館内）
〒９４１-００５６
新潟県糸魚川市一の宮１-２-２
電話番号　０２５（５５２）７４７１